

山鉾巡行

今日17日は山鉾巡行の日である。祇園祭は7月の一か月間繰り広げられる祭であるが、巡行前夜の宵山、そして山鉾の巡行に優るものはない。山鉾巡行の翌日からも祭事は月末まで続くが、宵山や巡行があまりに華々しいものだから、後祭りは聊か分が悪い。

四条通りを東に向かって、囃子に合わせゆっくり曳かれる姿は絢爛であり優雅である。やがて先頭の長刀鉾が河原町通りにさしかかる。方向舵を持たない四輪を、道に敷いた竹に載せ、水をかけながら90度転回させる辻回しだ。山や鉾はいわば寄木で造られているものだから、転回の間中ぎしぎしと軋む音を発する。無事転回した山や鉾はまたゆっくりと、今度は河原町通りを北上する。その後数回の転回を経て、出発地である町内へと戻るとすぐに解体され、町内所有の倉に納められる。市中の災厄を集め、それを祓うことを巡行の目的としているものだから、集めた災厄を留めることのないよう即時に解体されるのである。その儚さ、潔さもまた祇園祭に相応しい。

祇園祭のような都市の祭が夏におこなわれることが多いのは、夏の疫病を鎮めるといふようなことを祭の目的の一つとしているからなのだろう。今も昔も京都の夏は暑い。平安京の夏は旱魃、水害の多い地であり、餓死者、疫病に倒れる者を多く発生させた。時にそれは、誰彼の祟りだともされた。9世紀の貞観年間、政権は、風潮に乗じて政争相手の御霊が災いをもたらしているとし、元はといえば人々の自然に対する敬意と畏怖に端をなす呪術的な民間信仰を起源とする御霊会を、国家行事として神泉苑にて催した。民間の信仰の形態に倣うように見せて、その実、人心を惹きつけようとする常套の方法だ。

この神泉苑御霊会がのちに祇園八坂社の御霊会となる。祇園御霊会は一旦廃れたものの、室町時代に有徳者ら町衆によって復興され、その際、山鉾を巡行させるほぼ現在の姿となった。なお八坂社に祀られる牛頭天王という神仏習合神は、釈迦が説法をおこなったインドのとある寺院を守護する神である。このインドの寺院の和名が祇園精舎であることから、牛頭天王を祀る場を祇園社と呼ぶようになった。平家の居館地であり政権の地であった六波羅は、なるほど八坂社に近い地である。

50年よせて2

『光陵の30年』を読み進める中で、気に掛かる一文があった。

光陵の自由な校風の下で体育祭は生徒の自主運営とされ、応援団も伝統に則るものとはいえ、あくまで自発的に形成・活動する。柄にもなく私が白組の応援団長を引き受けることになったのも、もとはと言えばそんな光陵の校風による、則ち、生徒の自主性に委ねられているということは、生徒が動かないと何も始まらないのであり、そこで事を進めるためお互い押しつけあった結果なのだ。覇気を欠き、応援団長にあるまじき態度だ。

このあと、先輩の指導と仲間の助けがあり「応援合戦で優勝することができた。」と続くことから、この文は優勝獲得の喜びを書くための前振りであったのかもしれない。ただ、団長の文章の直前に掲載されている教員の文章に、「リーダーシップをとれる人材が豊富であるはずの光陵に、自分がやらなければという生徒が少なくなってきた。」という一節が見えることから、「お互い押しつけあった」「覇気を欠き」というのが当時の様子であったことには間違いなさそうだ。「座談会」というページには、「学音祭なんかみてる、まだまだうちの生徒は力があると思うよね。」という発言があるのだが、これは「力があると思うよね」が主眼ではなく「力がない」ということを言うものであり、「比較の問題でね、前に比べれば光陵生はだいぶ落ちたよというけれども、でも素質、資質というのは相当あると思うんですよ。」と、「相当ある」と言いながら「光陵生はだいぶ落ちたよ」と言い、「比較の問題でね」「前に比べれば」という言葉により、昔は良かったと言っている。光陵に限ることのできない時代性というものもあるのだが、それにつけても、素質はあるが覇気はなく、他人任せの無責任、リーダーシップなどどこ吹く風、というものが散見される『光陵の30年』の一節であった。

その10年前の『光陵の20年』には応援の記載がないことから、体育祭の応援は20年から30年前に始まったことと推測できる。その『光陵の20年』に10期生の書いた「あいさつ振興会について」という、大いに興味をそそられる一文があった。

人間、誰も人生を楽しくいきたいと思う。高校生活も当然日々楽しくありたい。しかし今のシラケた雰囲気は、本来の学校生活のあり方ではない、みんなで何かを創りあげる喜びを持てる自由闊達な雰囲気のある学校生活を築きたい。そのためには一体どうしたらいいのか。こんな命題を、当時、大竹、中林、黒木といった連中と何度も話し合った記憶がある。その結果、今のあきらめにも似たシラケた雰囲気を変えるには、与えられた高校生活という枠組の中でも、自分たちでしかやれないことを、自由に思いきりやれるんだということを示そう、という意見が出る一方、そのためには権利の主張をするだけでなく、義務を遂行しなくてはだめ、無責任といった言葉をなくす為にも、あいつらのやることなら、やらせてやろうといった信頼感を築き上げることも大切、という意見も出た。その結果、その両方をカバーするため、当時ダサイと思われていた生活の基本であるあいさつというものをあえてテーマにし、朝一番に登校し、……最初は、アホとか、なんだこいつらといった顔をしていた人たちも、次第に挨拶をしてくれるようになった。一方、先生方の理解を得て、学校生活をテーマに夏休み、校内合宿を開催するなど、その後随分いろいろやりたいことをやったような気がする。……

この文から私は二つのことを感じ取った。一つは、光陵10期の頃は「今のシラケた雰囲気」の様相を呈していたのだが、その中であって、そんな雰囲気は「学校生活のあり方ではない」、「みんなで何かを創りあげる喜びを持てる自由闊達な学校生活」を、「築きたい」と主体として主張していると感じ取り、もう一点は、「主張をするだけでなく、義務を遂行しなくてはだめ」「信頼感を築き上げる」ことが大切であることを、決して教養字句としてではなく、自分の言葉として語っていると感じ取った。『光陵の30年』の頃が果たしてどうであったかは不明であるが、この『光陵の20年』に記されたことは、30年後の現在に大きく息づいていると思ったりもしている。なおこの文を読み進めるにつれ、筆者が話し合った仲間の一人の名に、私は思わず眼を止めることになった。

10期の頃のあいさつ振興会が、光陵生のステキな挨拶の始まりであるかどうかは知らない。

来校者から、「光陵生は挨拶が素晴らしい」「私にまで挨拶をしてくれて嬉しい」というようなお褒めの言葉をよくいただく。私自身のことではなく生徒のことを褒められているのだから、「生徒の挨拶は清々しくて、私も元気をもらっています」などと平気で返している。「挨拶だけではなく、授業に真剣に取り組んでおり、行事や部活動への熱意も素晴らしいですよ」と言いたいのだが、流石にこちらは2回に1回程度に留めている。

体育祭の応援は20年以上続いているものであり、その練習は辛くもあり厳しくもありながら、先輩から後輩に受け継がれ、生徒が大切にしているものである。ただ20年というのが悩ましい。これが5年だと「5年も続く伝統的な」と言うのはおこがましく、100年だと「たった100年」というのも皮肉っぽい。どこの学校にでもあるというのでは決してないのだから、光陵に独自のものであり、生徒の皆さんが大切にしていこうと主体的に思い行動するのなら、本校の伝統的な行事として語り得るものになっていくと思う。素敵なお顔と挨拶、何事にも真剣に取り組む姿勢、そして学校のこと、友人のこと、先生のこと好きだという光陵生。これもまた光陵高校、光陵生の伝統とされるべきものであろう。

他にも挙げ得ることやものが数多たあると思う。

50周年にあたり、光陵高校の伝統を語る事象はたしかに揃った。しかし、伝統を語るものが増えたことがその学校を伝統校と呼び得ることに直結するというものではない。

さて光陵は、伝統校たり得るか。